

九州説と畿内説の邪馬台国論を考える(2)

日本先史古代研究会会員 中島康之

(五)間違いだらけの「邪馬台国」畿内説 安本美典氏から学ぶ

今(いま)日本の考古学界が大きく揺れている。大報道された旧石器の発掘が捏造であったと言う。発掘者は自分が埋めた物を取り出していたのだ。考古学の発掘がしばしば、より古いものなら良い、より新奇のものなら良いとの宝探しの状況となって、発掘者の主観に基づく判断まで大きく報道され、発掘者以外の人から出される疑問や検討の要望は片隅に追いやられる状況となり、そのツケが一気に噴出した感じである。発掘の成果については、色々な立場の人による十分な論議や検討が必要だ。また検証の方法についての厳密化が求められる。

邪馬台国問題も又そうである。最近の新聞・テレビの古代史関係の報道では「邪馬台国畿内説」へ草木もなびく観がある。この問題については、既に議論の決着が付いている式の特集を組んだマスコミ＝週刊読売もあった。「邪馬台国畿内説」を強く主張する方々の論理はあまりにも粗放である。思い込みの為か、基本的な事実についての誤りが多すぎる。記紀等を始めとする日本の古文献については、江戸時代の本居宣長の「古事記伝」など以降膨大な研究の蓄積がある。畿内説に立つ場合はそのような研究資料のほとんどを放棄して省みない事である。畿内論者のほとんどが、記紀の古伝承と十分整合的な古代史を構築することは、不可能と見られる。

畿内説は「考古栄えて記紀滅ぶ」と言われる程、日本の古典を考慮しないことによって成立している。一方の「邪馬台国九州説」の立場に立つことによって「記紀」など日本の一級資料を生かす道が開かれる。記紀では大和朝廷の始源は九州に在ったと記されている。九州説をとれば日本の古代に付いての構造的なイメージがつかれる。歴史学はすぐれて総合的な学問である。中国の文献・日本の文献にも公平に目配りしなければならない。日本の古文献を意図的に無視してはならない。

(六)宣伝優先主義の誤り

「邪馬台国畿内説で決まり」式の議論が盛んになったのは、奈良の黒塚古墳出土の三角縁神獣鏡が34面出土したことや、同じく奈良のホケノ山古墳が発掘され、中から「庄内式」と言われる土器や「画文帯神獣鏡」が出土し、新聞・テレビなどのマスコミで、これ等が邪馬台国と結び付くものとして大きく報道されていることに関係している。

これらの発掘を行ったのは奈良県橿原考古学研究所という公的機関の所長樋口隆康氏である。発掘以前より強力な畿内説に立っている樋口氏は、これら黒塚・ホケノ山古墳の発掘の結果をキッカケとし、材料としてすべてを畿内説の立場からのみ解釈し結び付け、マスコミを通じて大々的な宣伝を繰り返す挙に出ている。そしてその発表内容は単に発掘された事実に付いての解釈の相違と言う範囲を遙かに超えている。発掘の成果自体とその解釈とは本来分けて考える必要がある。発掘が示している事実は発表されている解釈を導くものかどうか学問的に充分検討される必要がある。銅が出ているのに金が出たと発表しているようなことはないか。現実には学問的検討よりも、マスコミ受けの発表の方が優先されている。地味な形での批判や疑問点の指摘等は、マスコミの喧噪にかき消されているのである。

かくて樋口隆康氏などの事実無根の発表などが大々的にまかり通ることとなる。しかし誰かが、今こそ確りとこの問題点を強く指摘しなければならない。多額の費用を掛けた奈良県の県をあげての地域おこし、宣

伝事業に邪馬台国問題が利用されている面が、今や強く出ているのである。年代が異なり邪馬台国問題の解答と何等結びつかないものが、結びつけられて報道されている。報道内容はしばしば事実や論理的整合性や学問的検討の結果と無関係である。

(七)樋口隆康氏の説がいかにも誤りと無根の事実満ちているか？

樋口説・・・黒塚古墳・ホケノ山古墳出土の三角縁神獣鏡・画文帯神獣鏡が邪馬台国問題、卑弥呼が魏の皇帝から与えられた鏡 100 枚と関係があるとする。すなわち「卑弥呼の鏡」であるとする。

反論 1・・・魏の境域内では、この二種の鏡は全く存在しない、また魏の国内からも一枚も出土していない。(中国考古学者 王仲殊・徐芊芳 中国社会科学院考古学研究所)

反論 2・・・三角縁神獣鏡は畿内では、四世紀の古墳時代の遺跡からのみ出土し、邪馬台国時代(三世紀)の墓には全く出土していない。更に鏡の直径平均 22～23cmで、中国から発掘される後漢・三国時代の鏡よりはるかに大きい。したがってこの鏡については、中国から輸入された鏡ではなく我が国で作られた鏡と思われる。(森浩一・奥野正男説)

読売説・・・第七号鏡は画像文帯の四神四獣鏡である(以下省略)しかし三・四世紀の日本で「象」特に「駱駝」の絵が描けるとは思えない・・・だからこの図像があるだけでも、この鏡は中国製としか考えられないであろう(読売新聞掲載)

毎日説・・・鏡を鑑定した樋口氏は「当時の倭人が見たことの無いラクダの模様を作れるはずはなく“銅出除州帥洛陽”の銘文通り鏡は中国で作られたのであろう」・・・と話している(毎日新聞掲載)

反論 3・・・上記の理由でどうして「中国製としか考えられない」との説になるのであろうか。たとえば次のような議論をすればその論理の粗放さが伺える。「キトラ古墳には、白虎が描かれている。虎は日本にいない動物である。当時の日本人が見た事の無い虎を描けるはずはなく、キトラ古墳の壁石は大陸から輸入したものであろう」・・・式のものである。文化の伝来・工人の渡来等様々な他の可能性がありうるのに、すこしでも「中国鏡説」と結びつくものは、中国製説のみの立場から解釈しようとしているように見える。樋口氏の論法は始めに「三角縁神獣鏡=中国製説」ありき・・・なのである。

邪馬台国畿内説を取る方々の中にも、三角縁神獣鏡などは卑弥呼の鏡では無いとの説をとる人も決してすくなくない。

○河上邦彦(橿原考古学研究所)は黒塚古墳の直接の指揮者であるが氏自身も三角縁神獣鏡が卑弥呼の鏡などではないと明言している。(関西大学大学院終了)

○石野博信(徳島文理大学)も卑弥呼の鏡ではないとの文を発表されている。(関西大学大学院終了)
白石太一郎(国立歴史民俗博物館教授)も邪馬台国畿内説ではあるが鏡については、「日本列島内で400面近くも出土しているにもかかわらず中国大陸で一面も出土していない鏡(三角縁神獣鏡)を中国鏡と考えるのは論理的に無理」との説を唱えている。

京都大学は近畿に在る、かつての王城の地であるそこを発掘すれば、多くの物が出土する地の利が与えられている。京大勢がリーダーに当然成りやすい。現在京大を中心とする考古学者たちはどんなに論理的に無理があろうと「三角縁神獣鏡=卑弥呼の鏡」説に固執して止まない。強力な刷り込みが行われるとそうなるのであろうか？

(八)ホケノ山古墳に付いての七つの疑問

そもそも邪馬台国論争は魏志倭人伝の記述から始まったものである。ホケノ山古墳の示す事実は倭人伝との記述の違いがあまりにも多すぎる。

①“棺あって槨なし”の魏志倭人伝の記述に合わない。

ホケノ山古墳では木槨木棺が見つかっている。木の枠で囲った部屋があり、その中心に木棺があったという。

②画文帯神獸鏡は中国北方の魏の鏡でなく、中国南方の呉の系統の鏡である。

ホケノ山古墳からは上記の鏡が出土している。中国の魏の国と交流があった邪馬台国の鏡としては相応しく無い。この鏡はわが国では 150 面ほど出土しているが、四世紀の古墳からの出土で、卑弥呼の時代と異なる。すなわちホケノ山古墳の築造年代は説に合わない。

③魏から賜った鏡にしては数が多すぎる。

三角縁神獸鏡はすでに全国で 500 面以上出土、画文帯神獸鏡は 150 面ほど出土、合わせれば 650 面に達する。卑弥呼が 100 面賜ったと倭人伝に唯一度だけ書かれている数を大幅に越してしまう。

同志社大学名誉教授森浩一氏は言う。「過去に存在した鏡の現在の出土率は、多く見積もっても 10%程度であろうか」と。すなわち 650 面の鏡が出土する為には、過去に 6500 面の鏡が中国から輸入されなければならない事になる。卑弥呼が魏に使いを出した 239 年頃から魏が滅ぶ 265 年まで 26 年間である。この 26 年に 6500 面も輸入する事は毎年 250 面の鏡が平均的に輸入されなければならないことになる。森浩一氏の 10%はかなり高めの推定である。仮に 5%の出土率と見れば 1 万 3000 面の鏡が 26 年間の間に輸入されたことになる。中国で一面も出土の無いこれらの鏡がこのような数で輸入される事自体論外の説ではないだろうか。

④ 公平な年代比較が行われているか。

ホケノ山古墳の築造年代を三世紀中頃卑弥呼の時代と同世代との見解には大いに疑問がある。しかし仮にその点を一步譲って卑弥呼の頃であるとしよう。この場合でも以下のような事実が残る。九州前原市の平原王墓は、三世紀の卑弥呼の時代とすることには現在の考古学では異論のないところである。

(イ) 平原墳丘墓は「棺ありて、槨なし」で倭人伝の記述に一致する。ホケノ山古墳は合わない。

(ロ) 平原墳丘墓は北中国系の鏡、魏の系統の鏡のみ出土して、南中国系の鏡は出土していない。ホケノ山古墳からは、南中国系の鏡(呉の系統の鏡)が出土、北方系の鏡は僅か二面の出土にすぎない。平原墳丘墓からは北方系の鏡ばかり 40 面出土している。

以上からも九州平原王墓の方がホケノ山古墳よりもはるかに倭人伝の記述内容を満たしている。これ等の事実から見ても、どうして「邪馬台国畿内説」が有利になるのであろうか。本来年代推定等かなり確かな平原王墓を基準とせず、証拠に乏しいホケノ山古墳で年代を決めようとする事自体、無理がある。

⑤ 鉛の同位体比の研究成果の面から反論 馬淵久夫教授(作陽大学)の説による

更に日本古代史全体を考える上で極めて重要な意味がある鉛の同位体比に基づく研究がある。

鉛は産出地によって「質量が異なる」、鉛は四つの質量の異なる原子の混合物で、その混合率(同位対比)が産出地によって異なる点である。四つの同位体(204・206・207・208)これを基準に青銅器の製作年代を考える上で重要な基準・手掛かりとなる。

- 三角縁神獸鏡・画文帯神獸鏡→中国南方系の銅原料を使用
 - 九州弥生時代平原王墓出土の鏡→中国北方系の銅原料を使用
- 材料(銅)の出土地域に違いがあることがはっきりしている。

⑥ ホケノ山古墳の築造年代を卑弥呼の時代に合わせる為、無理をして古めに推定しているように見受けられる。

関川尚功氏(樫原考古学研究所)によると、日本書紀の伝承では箸墓古墳の被葬者は崇神天皇の時代に活躍した倭迹迹日百襲姫とされている。一方崇神天皇陵古墳については四世紀中頃築造と見るのが現在の考古学者の多数意見である。とすれば箸墓古墳の築造年代も当然四世紀中頃と同時代とした方が文献的事実とも一致する。ならば箸墓より時代が少し遡ると見られるホケノ山古墳は四世紀頃まで時代が下がる可能性が大であろう。総じて邪馬台国に結び付けんが為の無理な考え方に他ならない。

⑦ 矛・絹・鉄等を無視してはならない。

倭人伝に云う「倭人は兵には矛を用いる」と。銅矛であれ鉄矛であれ矛が多量にしているのは、畿内ではなく北九州である。ホケノ山古墳から矛は出土していない。また倭人伝には「倭綿」「帛布」など幾つかの絹織物が登場する。魏の景初三年の詔書に見える倭の女王卑弥呼に下賜された、品物リストの初めに掲げられているのは、絹であって鏡ではない。そして邪馬台国のあった弥生時代後期までの絹はすべて九州から出土している。

布目順郎氏(京都工芸繊維大学)の意見では「発掘の進んでいる近畿地方に、今後質的にも量的にも、九州を上回る弥生時代の絹が出土するとは考えられない。」そうした立場に立つならば「絹から見た邪馬台国の所在地推定」の結論は自明と言うことになる。